



ぽふん、ぽふぽふっ……

柔らかくて暖かいものが頬を叩く。少しくすぐったいが心地いい感触に頬を緩ませていたイギリスは、自国のピクシ―達を連想させていた。

そして、夢見心地のまま、払いのけるように軽く手を振りながら、柔らかい声を向けていく。

「もう少し、寝かせてくれ……」

寝言に近い口調でも、反応があったことの方が嬉しかった相手は、逆に叩く力とスピードを強めていく。

「もう、はよ起きてくや！」

聞き慣れた声に、思わず耳を疑ったイギリスは、重い瞼を緩々と押し上げていく。

そして、自分の頬を叩いていたものの正体に気付いた。

見下ろしてくる顔は、少し心配気に陰っているが、見飽きるほど見つめてきた相手だ。

しかし、今は大きな肉球付きのふわふわの手と、もふもふの耳と尻尾が付いたわんこ状態だった。

「……可愛い」

寝ぼけ眼のまま素直な感情を吐露するイギリスに、思わず顔を赤らめたスペインは、照れくさいのを誤魔化すように怒鳴った。

「寝ぼけとらんと、ちゃんと目え覚ましてから喋れっ！」
真つ赤な顔で怒られたところで、可愛さに拍車が掛かるだけだった。

まだ夢の中だと信じて疑わないイギリスは、ベッドや天井を視界に入れた途端、スペインの家だと気付かされた。しかし、奇妙な違和感の方が大きくて、やはり夢なのではと考え直すと、目を覚ました途端に、全て消えてしまいそうて目を覚ますことを躊躇う。

夢と現実の狭間で揺れているイギリスが、再び瞼を閉ざす様子に、業を煮やしたスペインが、再び手を伸ばした。

そして、すらりと伸びた手触り抜群の耳を、無造作につまむと、軽く引っ張っていく。

「言うときけど、お前の方が可愛い姿になってんで！」

言葉とは裏腹に、髪を引っ張られたような感覚に、眉を強く顰めたイギリスは、勢いよく手を払いのける。

「痛てえくだる！引っ張んなっ！」

自然と口から出た言葉や違和感だらけの視界に、イギリスは、改めて自分の手に視線を落としていく。

そこには、普段の姿とはかけ離れた、獣のように毛に覆われたもふもふした小さな手があった。

まだ覚醒しきれない思考では、更に困惑するばかりのイギリスは、必死に状況を思い出そうと思の蓋を持ち上げかけた。

そして、少しでも落ち着こうと、のろのろと起き上がり、周囲を見渡した時、違和感の正体に気付いた。

それは、全ての家具が何倍にも大きく見えることだった。家が巨大化したのではなく、自分達が小さくなったのだと理解するのは、自分の小さな手を見れば一目瞭然だ。

まだ霞掛かった思考を彷徨わせるイギリスを他所に、自分